

修士論文要旨

学籍番号 20GH152 第 号

氏名 宗明英

人文社会科学専攻 (コース: 文化芸術)

論文題目

「弘前ねぶた運行団体における資源獲得」

弘前ねぶたまつりは、古くより城下町の夏の風物詩として知られてきた。近年は地元住民の地域アイデンティティを確認する行事として認識されている。ねぶた祭りは複数のねぶた運行団体（以下はねぶた団体と称す）によって構成されている。本論はねぶた団体に注目し、祭りに必要な資源をどのように獲得しているのか、また、祭礼を持続可能なものにするためには何が必要なのかを明らかにするものである。参与観察と聞き取り調査によって、有志によるねぶた団体である弘前ネプタ愛好会を考察した。さらに準備期間中に接触した地縁型のねぶた団体との関係も考察した。

論文の構成は、第一章では先行研究を確認し、研究目的、研究方法について述べた。第二章では弘前市の歴史的背景を押さえ、その背景から生み出されるねぶたに熱中する人物像、その人物像に近い調査対象者を確認した。第三章では参与観察と聞き取り調査で得られた情報から調査団体の特徴、メンバーシップの問題を明らかにし、団体の枠組と構成要因について分析を行った。第四章では、参与観察と聞き取り調査で得られた情報から調査団体はメンバーのネットワークを通じて祭りに必要な資金、人手を集めていることを示し、さらに調査団体の「支援者」について検討した。第五章では、聞き取り調査でねぶた団体における金銭は単に物質的資源の購入や社交場を設けることに利用されるだけでなく、「お金の負担＝責任の発生」の意味としてメンバーに把握されていることを示した。第六章では町内運行を行った非地縁団体と地縁団体の連携に注目し、資源調達に地縁と関わっていたことを把握した。また、ねぶた団体の社交場面における物的資源の重要性を考察した。その結果、以下のことを明らかにした。

①弘前ネプタ愛好会は、メンバーのネットワークから資源を獲得をしていた。「支援者」はメンバーとの関係の疎密によって、支援するもの（金銭または物質）と返礼に違いが見られた。資源の調達が順調に進むことで、団体の存続につながる。

②弘前ネプタ愛好会は中心の同質性が高く、異質な存在は周辺にとどまるという傾向があった。中心と周辺は実践の最中には「仲間関係」が、実践が終わった後は「協力関係」として成立するが、周辺を中心に近づける教育システムを作っていないため、周辺にとどまることしかできない。そのため、新しく中心となる人を育成をできず、この団体が継続することには限界がある。

③ねぶたの製作における、女性の力はまだ未開拓の状況であった。参与観察と聞き取り調査によってねぶた団体は男女分業の観念が強く、このような観念から生まれたねぶたの伝統的な教育構造は、女性がねぶた製作の全体像を把握することの妨げとなる。そのため、今後は伝統的な教育構造の改良と女性を中心に据える仕組みが必要となると考えられる。

【キーワード】ねぶた運行団体、資源、教育システム、正統的周辺参加、ジェンダ